

南京同文書院の実像を探る —書院生はどこで学んだのか—

原 田 和 広

サマリー：Through the recently published books about the Toa Dobun college have made clear the situation of students of the Toa Dobun college. But the real shape of the Nanjing Dobun college still not clear. The purpose of this paper is using old maps of Nanjing locate the real place of the Nanjing Dobun college, follow the footsteps of students of the Nanjing Dobun college, to make clear the earliest shape of the Toa Dobun college.

近年出版された東亜同文書院に関する著作により、東亜同文書院で学んだ者たちの状況はかなり明らかになってきた。しかしながら、南京同文書院の実像は未だ十分に明らかになったとは言いがたい。本論文の目的は、南京の古い地図を用いながら、南京同文書院の実際の所在地を明らかにし、南京同文書院で学んだ学生たちの足跡をたどることによって、東亜同文書院の最も早期の姿を浮き彫りにすることである。

キーワード：キーワード南京同文書院 (Nanjing Dobuncollege)

東亜同文会 (Toa Dobun Society)

金陵東文学堂 (Jinling Dongwen School)

清末 (Late Qing Dynasty)

妙相庵 (Miaoxiang Temple)

0. はじめに

東亜同文書院に関する研究は近年活発になっており、石田卓生『東亜同文書院の教育に関する多面的研究』（不二出版、2019年）や藤田佳久編『東亜同文書院卒業生の軌跡』（あるむ、2020年）等が出版され、東亜同文書院の全容等はかなり具体的になってきた。しかしながら、創設期の東亜同文書院、南京同文書院時代に目を転ずると、不明な点が多

く、南京同文書院の実態は、未だ十分に解明されているとは言いがたい。筆者は既に「南京同文書院と佐々木四方志」（『一般教育論集』第60号、2022年3月）において、南京同文書院開設の中心人物であった佐々木四方志をとりあげ、その妻・春尾とともに、これまで不明とされてきたその経歴を記すとともに、両氏の南京同文書院創設へ果たした貢献について述べたが、そこでは佐々木夫妻について記すに留まり、当時の南京同文書院の全容を明

(2) 南京同文書院の実像を探る ―書院生はどこで学んだのか―

らかにするところまでは到らなかった。東亜同文書院に関わる文献は数多くあるが、南京同文書院に関しては、例えばその所在地についても未だ具体的には明らかにはなっていない。そこで本稿においては、まずは南京同文書院の所在地等について、特に最初の校舎となった妙相庵について、当時出版された地図などを手掛かりに特定し、当時の状況を明らかにしていくことにした。なお、本文中の引用文献の旧漢字は全て常用漢字に改めた。

1. 南京同文書院開設当時の南京

(1) 1899年頃の南京

広く大陸で活躍し得る人材の育成を目的とした学校を開設することは、東亜同文会設立当時からの目的の一つであり、同会は学校の設置地の一つとして南京を選んだ¹。

東亜同文会は学校設置の場所に、なぜ南京という地を選んだのだろうか。

『東亜同文書院大学史』によると、東亜同文会が学堂を南京に開設することにしたその理由は、「同地が長江下流の中間に位置する政治的要衝の地であり、古来たびたび首都となって古都の風趣を保存し、学生教育の地として優れていたこと」²となっている。確かに、揚子江デルタ地域に位置する南京は、立地に優れ、古くから幾度も王都が置かれ、かつては金陵・建業等とも称された。明朝になり、都が北京に移ってから南京と呼ばれるようになったが、北の北京に相對して南京と名づけられたことから、この地が南の要衝と捉えられていたことが分かる。

この地を治める両江総督は、阿片戦争後に締結された南京条約（1842年）により開港した貿易港（広州・福州・アモイ・寧波・上海）の監督業務も担っており、清朝の中でも特に重要な役職であった。当時両江総督であった劉坤一は南京同文書院の開設にも深く関わっている。南京同文書院の開設は、1899年10月

29日に、東亜同文会の近衛篤磨が外遊の途中南京に立ち寄り、劉坤一と会談し、正式に決定された³。

このように、政治的要衝にして古都である南京は、確かにその条件だけを見ても、学校を開設するのに相応しいように思われる。しかし当時の南京は、太平天国の乱の影響が未だ残る寂れた地方都市の一つにすぎなかった。例えば、南京同文書院開設の頃、1899年11月に当時の南京を旅した内藤虎次郎の書いた『支那漫遊 燕山楚水』を見てみよう。同書によると、長江を船で下り南京に近づいての光景は次のように活写されている。⁴

（前略）下関より儀鳳門を入り、張之洞が甲午乙未の役、劉坤一の留守をあづかりし際に、修築せる馬路を行くこと、我が二里に近かるべし、かくして総督衛門に近き科巷の東本願寺学堂に抵り、暫らくこゝに宿りを求めぬ。この馬路は砥平にして、細柳路を夾さみ、樹間僅かに二三尺、皆根より三尺ばかり處より枝を生じたれば、時は已に孟冬に属し、枝葉蕭疎を免れざるも若し春初卉木萌生の期にも際したらんには、定めて煙るが若き嫩緑、行人の馬を驕らしむるならんと想ひやられたり。巡路工夫は日々修理と掃除とに怠らざれば、こゝは上海などに似て我帝都にも増したるべく見えたり、南京が帝都の実を失へること四百余年、加ふるに近歳長髮賊の大乱を経たれば、城内は荒れに荒れて、馬路の両側にだに人家の聯続せるは罕れに、田疇竹樹、犬牙交錯して、村落の間を行くが若し本願寺に至る一路、唯だ鼓楼の衢に当りて壮大空を衝くのみぞ、往事帝都の名残なるべく覚えて、其の附近には北極閣の寂しげに立たる下に、西欧宣教師の住宅特に目立て見えたり。聞く城内の市街の形を為せるは全面積の四分の一には過ぎざるべく、城の内外なる民屋を合わせたりとも城内の三分の

一を填つるに過ぎざるべしと、されば周九十六清里、其の規模の大は、北京にもまされる大都も現在人口十五六万を逾ずといふ、其の荒涼想ふべし。

「長髮賊の大乱」とは、太平天国の乱(1851～1864)のことである。洪秀全軍は、1853年3月に南京を制圧。南京を天京と改称し、1864年7月太平天国の乱が鎮圧されるまで首都とした。内藤が旅したのは、太平天国の乱が終焉してから35年後のことであるが、まだ乱で荒れ果てた南京城内が、この時点においても完全に復興していなかったことがよくわかる。明代に王都であった名残は鼓楼(明代創建の楼閣、南京の中心地にある)や北極閣(宋時代創建、南京最古の气象台)にあるものの、新しい建物は少なく、西洋からの宣教師の住宅が目立つほどであった。

この見聞録を書いた内藤虎次郎とは、この頃『万朝報』等の記者をしていた内藤湖南(1866年～1934年)のことである。内藤は下関に船でたどり着き、上陸している。南京は南京条約締結(1842年)の地となりながらも、南京自体はその時点では開港せず、その後、1856年6月27日の「天津条約」により、開港が約束された。けれど太平天国の乱の影響もあり、開港することが出来ず、遅れて光緒25(1899)年に两江総督より儀鳳門外下関に外国人居留地が設置されることが奏上され、開港された⁵。内藤が南京を訪れる前年の明治31(1898)年1月からは、大阪商船会社が政府からの補助金を得て、上海から漢口に至る揚子江航路を開始し、日本人経営の船が定期運航されるようになっていく⁶。このように、南京はこの頃ようやく開港し、交通の便や道の整備といったインフラが進み、外国人居留民が増え、急速に近代化が進んでいるところであったのである。

(2) 書院生が南京に入城したルート

内藤がそうであったように、この頃、外国人が南京に入城するルートは、揚子江から下関に入り、儀鳳門から南京に入城するのが一般的であった。書院生たちも、船で南京に着き、儀鳳門より南京城内に入城し、市街地へと到ったのであろう。南京に入城する書院生たちをまず迎えたのが儀鳳門である。【図1】として挙げたのは、民国期に販売されていたポストカードに印刷された1928年頃の儀鳳門であるが、書院生が南京に着いた時も、おおむねこのような様子で書院生たちを迎え入れたのではないかと想像する⁷。

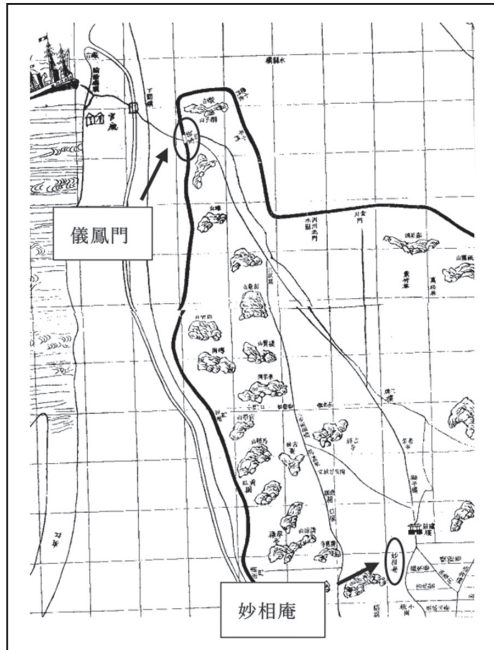
儀鳳門というのは、明代の南京城壁の北北西に位置する門であり、旅客にとって南京城市の入り口にあたる。儀鳳門はその後名を興中門と名を改め、後に市街地整備の中で取り壊されるが、2005年に再び南京政府によって再建された⁸。【図2】は、清の同光年間(1821年～1850年)の金陵省地図の一部である⁹。地図の左上に「下関」、そのすぐ脇に「儀鳳」の文字が見える。【図2】右下に小さく見えるのが南京市街地の中心に位置し、シンボルとなっている鼓楼である。儀鳳門から鼓楼へとつながる線が、張之洞によって整備された江寧馬路である。この道は南京中心部と下関を直接につなぐ石畳の道であり、当時の目抜き通りであった。鼓楼の脇には、南京同文書院が置かれることになった「妙相庵」の字も



【図1】1928年頃の儀鳳門(『老照片・南京旧影』より)

(4) 南京同文書院の実像を探る ―書院生はどこで学んだのか―

見える。南京に上陸した書院生たちは江寧馬路を辿り鼓楼に到り、妙相庵に着いたのだろう。



【図2】「金陵省城図」(清・同光年間) (『老地圖南京旧影』(上掲書)を基に作成)

妙相庵の文字が右下に見える。そのすぐ上にあるのが南京のランドマーク鼓楼。

2. 金陵東文学堂と南京同文書院

(1) 金陵東文学堂の設置場所

外国人の居留が公にも認められ、インフラの整備も進みつつあったことにより、1898年頃より南京では外国人の居留が増えていった。上掲の内藤の本の中にも、「農商務省の留学生たる平岡、杉山二氏」に迎へられたとあり、日本から既に役人が派遣されていたことが分かる。また、「総督衛門に近き科巷の東本願寺学堂に抵り」とあるように、東本願寺の東文学堂も既に設置されていたことも分かる。平岡、杉山二氏は東文学堂に派遣されていた留学生である。

南京に設置された東文学堂の正式名称は、金陵東文学堂といった。東本願寺は日清戦争後より中国での布教活動を再開し、清国政府や各地方政府から黙認される形で、各地に布教所や中国人に日本語を教える学堂を設置していた¹⁰。劉健雲『中国人の日本語学習史』によれば、明治に入り大陸における仏教布教に力を入れるようになった東本願寺は、中国各地に学堂を設置するようになり、杭州日文学堂と同じく光緒25(1899)年1月20日に、金陵東文学堂を開校した。校舎は金陵城北浮橋馬路西首一枝園に設けられていた¹¹。

南京同文書院と金陵東文学堂の関係は深く、この東文学堂と南京同文書院の間には、後述するように、一時期校舎譲渡の話があった。邦人がまだ少ないこともあり、両校は互いに協力関係にあったことが様々な文献からもうかがえる。実際、近衛篤磨が两江総督劉坤一と会見するために、10月29日に南京入りした際に出迎えたのは東文学堂の関係者であった。以下に『近衛篤磨日記』の記述を記す¹²。

午前三時半南京に着、直に上陸す。端艇の混雑名状すべからず。道台より差廻はされたる一官吏出迎ふ。外に本願寺東派出張所の一柳^(不記)外^(不記)両三名、三井組の留学生等もあり。海岸の船積問屋なる一室に小憩し、夫より道台の廻されし馬車にて一同海岸を^{シャークアン}発し、下関に至る比、天既に明らかなり。道路は日清戦役中、張之洞の当省総督兼務中に竣工したるものなりといふ。坦々^(不記)の如く、支那には珍しき道路なり。これを過ぎて第一の関門あり、又進む事半時間、第二の関門に達す。六時半過南京の市街に達し、先づ本願寺出張所に入る。少時休息す。(中略)一行先づ朝飯を喫し、同出張所構内なる金陵東文学堂の状況を聴き、教場等を一覽す。

南京に上陸した篤磨は、金陵東文学堂で休憩と食事を取っている。ここで、近衛篤磨を出迎えたのが金陵東文学堂の一柳知成堂長であった。堂長自ら近衛篤磨を迎えているということからも、東亜同文会と金陵東文学堂との関係の深さがうかがえる。

ここで予め金陵東文学堂の所在地を確認しておくとして、その場所は先述のように、北浮橋馬路西首一校園であった。1898年『江寧府城図』¹³を見ると、この場所は当時の中心地であった三山街や夫子廟に近い。学校から道なりに南に進めば、約700mで右側（西）に洋務局があり、交通至便の場所であった。その後、金陵東文学堂は明治32（1899）年の年末、大行宮古科巷に校舎移転したが、その場所も最初の校舎から南に630mくらい移動した場所で、洋務局にはより近くなった。そしてその後3回目の移転をし、盧妃巷広芸街に移った¹⁴。3回目の移転がいつ実施されたかは明らかではないが、後に南京同文書院の分院が置かれた「王府園」の近くである（【図8】参照）。金陵東文学堂の3周年を記念して、明治35（1902）年6月8日に校舎の前で撮影された教師と生徒の集合写真が残されている¹⁵。

(2) 金陵東文学堂譲渡の計画とその不調

このように、金陵東文学堂が置かれていた場所は、いずれも南京の中心地に位置し、交通至便の土地にあった。そのこともあってか、南京に学校を開校するにあたり、東亜同文会は金陵東文学堂に校舎の譲渡を依頼した。この件に際して、三田良信は北方心泉の日記とノートで検証した上で、次のように結論づけている。¹⁶

日記及びノートの記述を総合しての私見は、東亜同文会は南京に於いて学校を経営する為、先に東本願寺が清国政府の許可を受けて開設した“金陵東文学堂”の譲渡を

本願寺に要請したが、条件が合わず不調に終わった。

金陵東文学堂に対する校舎譲渡の依頼に関しては、『近衛篤磨日記』の明治32年10月20日の項目にも同様の記載がある。以下に記すのは、旅の途中である近衛篤磨に届いた東亜同文会本部からの知らせである¹⁷。（傍線部は筆者による。）

南京は対清政策上重要な地に御座候間、同地に鞏固なる根拠地を作らん為め学堂を設置し、本会派遣の留学生及支那学生を教育する事に致し、佐藤少将自ら進んで之れが経営に当たる筈に御座候。

右経費は凡そ六千円の見積にて、内三千五百円は三井より寄附し呉る、筈、残り弍千五百円は本会支那部予備費中より支出致見込に御座候。初め新に学校を同地に設立するは経費も少からず、且つ南京には既に本願寺別院の設立にかゝる南京学堂ありて、同じく本邦人の設立する同種類の学校を増設するは如何かと存候に付き、本願寺より其学堂を引受くるを得ば彼是得策ならんと本願寺と種々交渉致候処、別院当事者の不承認諾に由り交渉遂に纏不申候得共、右予算にて創立の経費には大丈夫に御座候間、断然別に一校を設立する事に決定致候。本会にて別に一校を設立する事に付ては本願寺も之れに反対不致、却て協和助力する筈に御座候間、其辺は御配慮被下間敷候。

ここからも本願寺との交渉が既に行われていたことがうかがえる。ただ現地の担当者の反対（筆者注：一柳等金陵東文学堂サイドのということであろう）により交渉はまとまらず、南京同文書院サイドも、独自での設立を目指すこととし、本願寺もこれに協力することになった。事実、金陵東文学堂の責任者で

(6) 南京同文書院の実像を探る ―書院生はどこで学んだのか―

あった堂長都監・北方心泉の日記にも、7月から8月にかけて、篤麿や長岡護美や佐藤正ら同会の要人たちと会見、9月4日から9月16日まで上海出張、10月2日に再度長岡護美と面会、学堂譲渡について円満解決との記述がある¹⁸。

3. 南京同文書院の実際の所在地

では、金陵東文学堂との交渉が決裂した後、同文書院はどこに設立されたのか。その場所について、設立された時期に従い、順を追って具体的に見ていくことにしよう。

(1) 仮校舎復成倉の劉公館

『東亜同文書院大学史』によると、最初は「秦淮に沿った復成倉の劉公館に寄宿し、これを当座の校舎とした。」¹⁹とある。このことから、最初の設置場所は、復成倉という場所にあった劉公館であるということが分かる。

復成倉とは南京のどこか。1898年「江寧府城図」を見ると、この地図の右端に明の故宮があり、その西に「復成倉」という地名がある²⁰。けれどこの地図にも、他のいずれの地図を見ても、「劉公館」という名称を見つけることはできない。おそらくは「劉」という人物の持ち物である建物ということで、民家であったからだろう。同文書院がここにいた期間は長くはなく、1900年1月から4月まで、あくまで仮住まいということであった²¹。

なぜ学校のスタートが民家だったのか。その理由は、1898年12月21日付の佐々木四方志から近衛篤麿にあてた手紙に詳しい。この手紙の中で佐々木四方志は、12月16日に行われた劉坤一と小田切領事との会談の様子を報告した上で²²、学堂の建物について以下のように述べている。²³

一、学堂建物は現今適當の者無之に付き、

我々在住近傍なる二階建家屋(敷金貳百円、家賃貳拾貳円)を借り入る事。(中略)

学校に使用すべき建物は総督府より借り入るべき筈の処、適當の物無之、又最初より家屋を無償にて貸与せよとも申し兼ね候儀に付、家賃を要する家屋を借入るゝことゝ相成り候。家賃は貳拾貳円にて非常に安価に候得共、敷金貳百円は実に困まり候。

佐々木四方志は1899(明治32)年12月初めに南京に着き、南京同文書院開設に纏わる仕事を開始しているが、学校の用地確保については、当初の佐々木の思惑と違っていった。佐々木は学校の建物は総督府から無償で借り入れられるものと思っていたが、中国側に最初からそのように申し入れることがはばかれたので、しかたなく借りることにして、自分たちの住まいの近くに二階建ての家屋を借りたのである。これがおそらく「劉公館」である。12月22日付の井手から近衛篤麿に向けた書状の中では、南洋高等学堂の借り受けけることを画策したが、既に他の学校が使用しているということで断念。汪洋務局総弁の尽力により適当な場所を探すこととなったことが告げられており、「可成り速やかに在本邦の学生を募り、創設の資金を携え来たり形を造」ることの必要が説かれている²⁴。このように、南京同文書院は用地も定まらない波乱含みのスタートとなった。しかしそれでも佐々木四方志は洋務局の汪嘉棠等とも親しく交わり、各方面にわたりをつげながら、正式の校舎を探しに奔走した²⁵。

(2) 最初の校舎妙相庵

校舎を総督府より無償提供されることを期待していた南京同文書院の関係者であったが、小田切領事は3月初めに南京に出張し、劉坤一及び新任総督代理鹿伝霖と会見。小田切は総督代理の鹿伝霖の非協力的な態度を鑑

み、「総督よりして一の家屋を無償貸与せしむる一事は到底望みなきを以て、此際断然自ずから校舎を建築するの方針を被取度候」との進言を近衛篤磨に行っている。上海に比べて南京は地価も職工の工賃も安いので何とかなるのではないかという見解も付けられていた²⁶。おそらくはこのあたりで一つの方針転換が図られたのだろう。南京同文書院は、用地・校舎を自力で探す（筆者注：とはいえおそらくは洋務局の汪嘉棠等の協力は借りて）ということになったのである。条件としては、安価で借りられること、そして新たに建物を建てるだけの十分な用地のあることが条件となった。

その結果として探し出されたのが、妙相庵という仏教寺院であった。この妙相庵は南京同文書院として最初の正式の校舎であり、東亜同文書院としても、最初の校舎となった場所である。後述するように、妙相庵は広大な敷地を持っており、先に挙げた条件にびったり合致する場所であった。

まず妙相庵の具体的な場所を改めて確認しておく。『東亜同文書院大学史』には、「儀鳳門の東に在る寺院妙相庵を校舎として借り受けることになり、一応、五、六十名の学生を収容できる施設を設けることができた」²⁷とある。しかし、この「儀鳳門の東に在る寺院妙相庵」という説明は不親切と言わざるを得ない。先述したように、儀鳳門は長江を背に南京の北北西に位置する門であり、南京の市街地はすべて儀鳳門の東に位置するからだ。『老地図南京旧影』所収の「金陵省城図」²⁸では、妙相庵は儀鳳門からほぼ東南方向に直線距離で約5.3kmの距離で、道路をたどっても約6kmの場所に位置する（【図2】参照）。説明としては「鼓樓の南」とする方が正確であり、「南京同文書院章程」にも正式な住所として「鼓樓妙相庵」と記されている²⁹。

ここで妙相庵という寺院の沿革を分かる限りで記しておく。妙相庵という仏教寺院の由

来は不明であるが、少なくとも清の『道光上元県誌』には、妙相庵は「唱經樓薛家巷後」にあり、南は唱經樓、北は黄泥崗、西は王家壩（現在の中山路の西側から漢口路）に到り、道光年間（1821年～1850年）には相当の規模を有したという³⁰。もっとも妙相庵という名よりも、清代中後期の金陵の人々には「屈子祠」という名称で知られていたようである。屈子祠とは屈原の祠という意味であるが、ここが「屈子祠」となったのは、かつて妙相庵の高僧・金海峰が、屈原と同じく入水して死亡したからで、金海峰と屈原の両名を偲ぶ為に、毎年端午の節句にここで歌会・茶会等の行事が行われ、多くの人々が参詣していたという。加えてこの一帯は絵のように美しく、遊山に人々が集まり、寺院は隆盛を極めた³¹。しかし太平天国の乱が起り、南京の街は灰燼に帰し、妙相庵も寺院としては廃れてしまった。清代の書家・何紹基は太平天国の乱が収まってすぐの同治三年（1864年）11月24日から後、友人と金陵を遊覧して妙相庵を訪れ、次のような詩を残している。³²

薄游訪古到江南，聞説天留妙相庵。秋海棠空僧去盡，池亭非復舊精藍。
妙相庵秋海棠壁最勝，今壁已毀餘景亦非昔。賊改為御花園也。（薄游古を訪うて江南に到る，聞説く天妙相庵に留むと。秋海棠空しく僧去り尽きて、池亭復た旧精藍にあらざ。妙相庵の秋海棠の壁は最も勝れたり，今壁已に毀ち余景も亦昔にあらざ。聞くに賊改めて御花園と為すとなり。）

何紹基は妙相庵のかつての繁榮が既に失われ、寺院として廃れてしまったことを嘆いている。しかし「賊改為御花園（筆者注：賊とは太平天国軍のこと）」とあるように、太平天国の時期にあっても、妙相庵はその美しさにより御花園として、ある程度その規模を維持していたのである³³。妙相庵の規模が大き

(8) 南京同文書院の実像を探る ―書院生はどこで学んだのか―

く、かつ庭園の美しい事は、上海総領事代理領事・小田切万寿之助が外務大臣子爵・青木周蔵に送った報告の中で、「妙相庵境内ニ広潤ノ空地ヲ存シ樹木鬱蒼池水アリ庭園アリ」としていることから裏付けられる³⁴。

妙相庵という名称から、南京時代を知らない東亜同文書院関係者は小さな素朴な庵を想像したのかもしれないが、ここまで見てきたように、妙相庵は南京で古くから知られた名刹であり、広大な敷地を持つ美しい寺院であった。

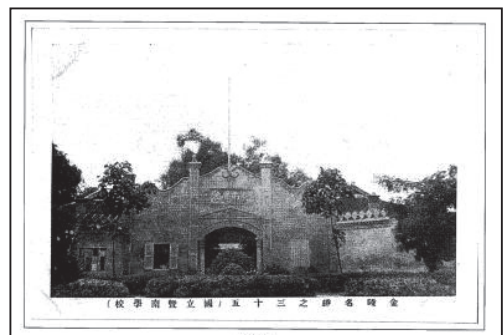
清末になり、僧侶が一部戻るものの、かつての賑わいは戻らず、その広大な敷地は学校として使用されるようになった。元南京師範大学附属中学の歴史教師・盧新建氏によれば、同文書院が出来る前に金陵電報局同文館(1883年～)という学校がまず使用し、その後南京同文書院が置かれ、同文書院が去った後は、華僑の子弟向け学校である暨南学堂³⁵(1906年～)が、更にその後陸軍大学(1931年～)、国立戯劇専科学学校(1935年～)と合計5校の学校が置かれた³⁶。ちなみに暨南学堂は後に広州に移り、暨南大学となり、国立戯劇専科学学校は、延安魯迅芸術学院、華北大学文芸学院と合併して北京に移り、中央戯劇学院となった。このように、妙相庵という場所は幾つもの大学の揺籃となった場所であったのである。

妙相庵の場所はその後土地開発が進み、1928年に中山路が敷設されると³⁷、敷地はほぼ東西に大きく二分され、東の部分は学校に、西の部分は主に医院となった(【図4】参照)。分断された西側の場所の傍にはもともと「基督病院(キリスト教病院)」があった。先述の『1898年江寧府城図』³⁸では、妙相庵の隣に「基督病院」が確認される(【図5】参照)。この病院は馬林医院とも呼ばれており、1887年アメリカキリスト教会が設立し、カナダ人宣教師 W.E.Macklin(馬林)が院長を務めていた³⁹。これは南京で最初に開院し

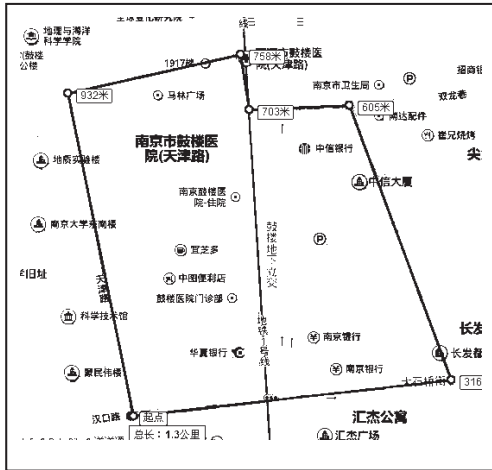
た西洋医学の病院であった。西洋医学の病院が隣接していることは、東亜同文会が学校を設置する上で安心材料となったのではなかっただろうか。この病院は日本軍占領下においては日本の同仁病院分院となり⁴⁰、やがて現在の南京鼓楼医院となった(【図4】参照)。

先の劉公館からいつ妙相庵に移ってきたかと言えば、1900年4月21日午前10時発の近衛篤磨宛の南京からの来電に、「移転した授業はじめた安心せ」とあるので⁴¹、4月中旬には移ってきたようである。開院式は5月12日であるから、開院式前に移転し、授業が開始されていたということになる。広大な敷地には寄宿舎もあり、ここは義和団の乱の影響により人員が上海に移る8月20日まで、約3か月間寄宿舎兼校舎として使われた。『南京日本居留民誌』には、南京同文書院として建物の写真が一葉載っている(【図7】参照)⁴²。おそらくは書院生が使っていた寄宿舎或いは校舎の写真なのではないかと推測する。

以上見てきたように、妙相庵は南京で名刹として知られた寺院であり、街の中心部に位置するだけではなく、広大で美しく、学校を建てるのに好適な場所であった。このような良い場所を借りることが出来た背景には、おそらくは佐々木四方志をはじめとする現地の関係者の相当の奔走があり、洋務局の汪嘉棠等のサポートもあったのであろう。



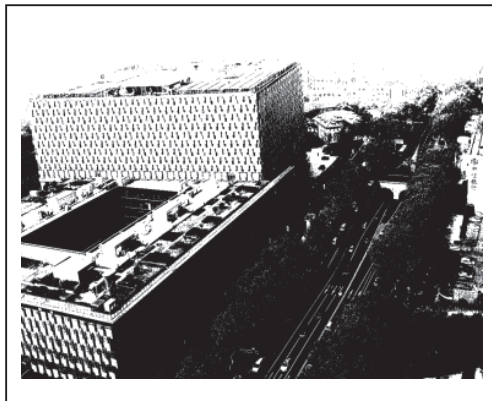
【図3】南京のポストカードに印刷された暨南学堂。後ろの鬱蒼とした森に名残が見える。



【図4】現在の南京の地図上での妙相庵。真ん中を中山路が横切っている。(盧新建氏提供)



【図5】基督病院(2014年11月11日著者撮影) この建物は1892年のもので、今は鼓楼病院に保存されている。



【図6】現在の南京鼓楼病院(2014年11月12日著者撮影) 手前の大きな建物が南京鼓楼病院。



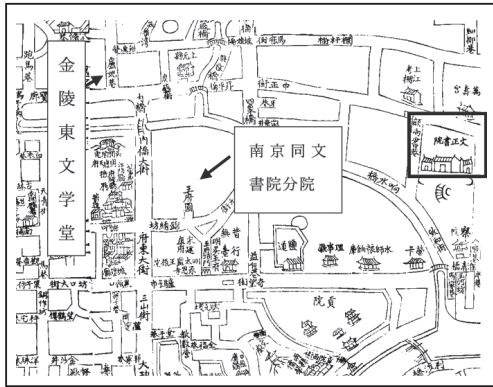
【図7】南京同文書院(『南京日本居留民誌』より)

(3) 中国人学生の校舎王府園

南京同文書院は開設時より中国人学生の募集も行っており、中国人向けには日本語の指導等が行われ、妙相庵とは別に分院が用意されていた。当時の繁華街である三山街、歡樂街である夫子廟に近い「王府園」に民家を借り上げ、ここを分院として学ばせたのである。『東亜同文書院大学史』では、「清国の学生については、城内の王府園に分院を開設

し、六月一日から開校したところ、入学する者は三十名に達した。漢学を鄒宝霜、日本語を曾根原千代三、英語を山田良政が担任した。」とあり、現地の中国人に大変人気があったことが分かる⁴³。

中国人学生が学んだ「王府園」は、光緒末(1908)年発行の「金陵省城古蹟全図」⁴⁴(【図8】参照)では、妙相庵から南に直線距離で約3km。道路で行っても3.5km程度の場所にはっきりその名が記されている。



【図8】『金陵省城古蹟全図』を基に作成

王府園の校舎がどのようなものであったかは分からないが、手狭になったため、後述するように大きな場所への移転が予定された。移転予定先の文正書院は、「王府園」から至近距離にあった。

4. 南京同文書院の校舎新築計画と中国人向け校舎の移転計画

ここまで見てきたように、妙相庵は教育機関設立に最適の場所であったこともあり、南京同文書院は妙相庵を20年間租借し、その空き地に改めて校舎と教職員住宅を建築する計画をたてた。井出三郎は『東亜同文会第8回報告』に掲載された6月14日付の「金陵紀行」で次のように報告している⁴⁵。

十日根津氏より学堂創立基地のことに賛成せし地方の紳士十余名を招き饗応せられたり土地の慣例として公共的に属する地面を租借するには土着紳士の承諾賛同を経ざる可らずとの事に候妙相庵境内の地は面積広潤老樹蔭森庭中池を穿ち甚た閑静の地にして学堂創立の基地には最も適当なりと被思申候十一日西村時彦君文正書院ノ許祖蔭なる人と同来根津氏と支那人学生養成の校舎に当たる為め文正書院租借の商量あり此の議も十中八九は成功するの見込あり現時王

府園の一棟の家屋を租借し支那学生二十余名を収容し次第に増員の勢あり愈々文正書院租借の議熟せは規模壮大にして支那学生教養所には最も恰好と存候（後略）

ここから、妙相庵を租借することに加えて、中国人学生向けの校舎も王府園から移転する予定であったことが分かる。中国人学生の人数もますます増加しそうな勢いであり、「王府園」の場所は手狭になることが予想されるので、西村天因（時彦）⁴⁶の仲介で文正書院を借りることを申し入れ、それは「十中八九は成功する」はずであった。同様のことは、上掲の上海総領事代理領事小田切から青木外務大臣への手紙の中にも記されている。⁴⁷

学院新築ノ基地ハ現在租借中ノ妙相庵境内ニ広潤ノ空地ヲ存シ樹木鬱蒼池水アリ庭園アリ最モ学院ヲ置クニ適當ノ地ナレバ此地ニ建築スル事ニ定メ土地ノ慣例トシテ土着ノ紳士ノ賛成ヲ得サシハ租借スル事ヲ得サルニ由リ土地ノ紳士十数名ニ謀リ其ノ賛成ヲ得テ最モ廉価ニテ土地租借二十ケ年ノ契約ヲ締結スル事ヲ得タリ土着ノ紳士等モ学院創立ノ事ハ大ニ賛同便利ヲ喜フル模様ナリ

支那人学生養成ノ事ハ本月初ヨリ城内王府園ト称スル街ニ支那流ノ中等位ノ一棟ヲ租借し課業ヲ始めシカ就学スル者日ニ毎ク一旬余ニシテ三十余ニ及ヒ甚タ熱心ニ日本語日東文英文ノ研究ニ従事セリ今度支那人及び西村天因君等ノ周旋ニ由リ有名ナル文正書院ノ一棟ヲ借り入れ事ニ交渉中ニテ契約書案モ既ニ起草し数日中締結纏マルベシ此ノ建物ハ頗ル壮大ニシテ曾テ文正公ノ神位ヲ安シタル所ニテ支那学生養成ノ場所トシテハ最妙ノ位置ナリ

学院は新築し、妙相庵の租借は二十年、土地の名士も賛同しており、価格も安価である

こと、文正書院の租借はほぼ決定しており、その建物も壮大であること等が記されている。妙相庵の20年借り上げと校舎新築、中国人用校舎の文正書院への移転は、現地スタッフの間では、既に決定していたのである。

5. 南京同文書院の開院

最適な場所を校舎に得て、南京同文書院は1900（明治33）年5月12日に開院した。開院式の様子を1900年5月31日付『大阪朝日新聞』8面に掲載された「金陵漫録」は次のように伝えている。

昨年来委員を派して計画されし同文書院の創立は春來益準備の歩を進め遂に城西の妙相庵を借りて開弁の端を開き五月十二日を以て開校式を挙げたり清国官場に向かて發せし招待状は五十余通に及びけれども上長官の旨を迎ふるに慣れし支那官吏は劉峴師の臨場如何を問合せ其の臨場なきを見て辞せしもの多きやにて來会者は清国人十数名に過ぎざりき尤劉峴師は洋務局総弁の汪氏を代理として参会せしめつ陶森甲錢德培楊恩慶の三氏を大人們と為し其余は老爺們なり外に米國宣教師一名同國婦人一名あり我帝國軍艦赤城が折よくも此際に来合して上原艦長を始め各士官軍服燦爛として場中を賑はせしは極めて光極なる上賓なりき其他在留本邦人及び留學生を合わせて数十人に及びぬ式は十二時比に始り先づ東本願寺の長谷川信了師祝文を朗讀し次に予れ詩二章を朗吟し次に汪觀察の祝辭あり次に上原艦長の演説佐々木委員の挨拶山田委員の支那語演説最後に安永氏留學生總代として演説を為し其より宴会に移れり教場を以て宴席に充て数卓に分れたりしが元來清國人は位の高下に拠て席を同じくするをだに厭ひ官位同じからざれば宴会などにも列せざる慣習あり此の日も大人們は別に一卓を設けん

ことを請求せしにて別に応接間を以て変則の一卓を設けられたり宴半ばにして日清兩國皇帝陛下の萬歳を三唱し佐々木大尉は米國人の爲に米國国歌を朗誦し米國宣教師も亦起ちて挨拶しぬ此より飲み且談じて十分歎を尽し午後五時頃散會しぬ（後略）

『朝日新聞』南京特派員であった西村天囚の手によるこの記事にもあるように、5月12日に南京同文書院の開院式は行われた。予定していた劉峴師即ち劉坤一の参席がなかったため、参加者は予定よりも少なかったが、それでも数十名の参加者があり、式のあとは、教室で祝宴が開かれ、宴席は5時頃まで開かれた。ここで天囚は漢詩を吟じている。ここにこの時吟じられた天囚の漢詩を記しておく。「南京同文書院告成。因邀中外名士譙于妙相庵予亦與焉。乃賦長句二章以呈。（南京同文書院成を告ぐ。因りて中外の名士を邀え妙相庵に譙す。予も亦焉に與る。乃ち長句二章を賦して以て呈す。）」との題辭が記された詩は次のようなものであった。⁴⁸

鍾山鬱鬱是龍蟠 / 文物江南称壯觀 / 風氣更開新學術 / 邦交益睦旧衣冠 / 興亡千古金湯固 / 離合機場詩酒歎 / 回首劫塵猶滿地 / 危機誰克轉為安

千里論交万感添 / 一堂觴詠独掀髯 / 同文況有同舟誼 / 異地原無異教嫌 / 從古楚材堪晉用 / 于今西勢奈東漸 / 唯須共醉披肝胆 / 中外賢豪賓主兼

新たな學術を育む学び舎が、この歴史ある江南の地に誕生した。古より楚材は晉用に堪えるとの例えもある。「西勢東漸」、つまり欧米列強のアジア進出の時代にあつて、同文の中國と日本はともに手を携え、人材育成に励もうではないか、という大意である。天囚の南京同文書院に寄せた期待の大きさが伺え

る。

ここまで見てきたように、南京の人々と南京同文書院の関係は極めて良好であった。日本人学生用の妙相庵の租借・校舎の新築には南京同文書院及び中国の関係者の奔走があり、中国人用の校舎に文正書院を借りること等には西村天因等在留邦人の助けがあった。関係者たちは南京で学校経営を続けていく気であり、その為の準備に勤しんでいたのである。

しかし20年借りの予定であった妙相庵に南京同文書院は結局のところ3カ月ほどしかいかなかった。義和団の乱の余波が長江にも及ぶ恐れがあったので、「劉坤一総督も難を上海に避けるように勧告」⁴⁹し、教職員と学生は同年8月に上海に移転したからである。上海に移った後もしくは「南京」の名前を保持するものの、明治34（1901）年5月からは東亜同文書院と合併し、名も東亜同文書院と改めることになった。

6. おわりに

実のところ義和団の乱による混乱は、南京ではさほどのことは無く、金陵東文学堂は1901（明治34）年には新しい堂長を派遣し、南京での活動を再開した。そして金陵東文学堂は、1909（明治42）年まで南京の地にあった。

義和団の乱以降も、現地からは南京同文書院の早期開校を望む声が寄せられていた。上海総領事館南京分館の天野恭太郎は、1901（明治34）年10月23日付けの公信の中で、妙相庵の「校舎ニ充用セラルベキ家屋ヲ修繕し器具ヲ備付ケル等必要ノ設備」が整っているが、南京同文書院がなかなか開校されず、妙相庵には問い合わせが多数寄せられていることを危惧している。「分院ノ設立ハ今正ニ好時機」であり、今を逃せば、「好機ノ再来スルコト保シ難キコト」も述べられていた⁵⁰。

施設の準備は十分に整い、現地においては開校が望まれていたのである。

にもかかわらず、南京同文書院はなぜ南京に戻ることが出来なかったのか。

その理由を筆者は近衛篤磨をはじめとする日本の東亜同文会の反対があった為と考えている。1900年6月7日に、佐藤正に代わり院長に就任した根津一は近衛篤磨代理の資格で劉坤一に会見し、南京同文書院の開校を申し出ている。根津は同年5月に東亜同文会に入会し、院長に就任したところであった。この事は、『山州根津先生伝』の中では次のように述べられている。⁵¹

時に佐藤正氏偶、病を得て職を辞す。是に於いて同文会長近衛公は、先生に懇托するに其の後任に当るべきを以てし、且つ更らに大規模の学堂を上海に設立して、南京同文書院を解散併合するの計画を依頼せり。先生之れを諾し、直ちに東京を發して上海に至りしが、先づ南京総督劉坤一、両広総督張之洞の賛助を得るを必要とし、近衛公代理の資格を以て長江筋に出発せり。初め南京に至りて劉坤一氏に会ふや、氏は先生を待つに公爵の礼を以てし、其の下関より総督府に至る沿道には、軍隊を堵列せしめて之を迎へ、祝賀の爆竹を打上げ、前方に儀仗兵を附する等、礼遇至らざるなし。此の時井手三郎氏も亦列席して劉坤一に会見す。先生、氏に向ひ予ねて作成し置ける東亜同文書院の綱領を示したるに、氏は喜悅満面、直ちに之に賛同し、上海は余の管内なれば出来得る限り助力すべしと約したり。先生転じて漢口に至り、張之洞氏に対して其来意を致し、且つ書院設立の計画を諮りたるに、氏も亦大に之を喜び賛成の意を表したり。両氏は其の学問に於て識見に於て、当代一流の政治家なりき。而して先生と相識るや、一見故の如し。是より書院の経営に就きて、二氏の直接間接の援助に

負ふ所誠に少からざりしといふ。

根津は近衛篤磨の依頼を受けて、開院してまもない南京同文書院を解散して上海に大規模な学堂を作り、ここに併合することを劉坤一に会見して伝えている。また、張之洞については、この後武昌まで行ったが、会見の前日連合軍が大沽砲台を攻め落としたとの報を受け、急遽会見を中止し、書面でもって伝えた⁵²。

なぜ近衛篤磨は根津に開院間もない南京同文書院の閉校を命じたのか。『近衛篤磨日記』1900年6月23日の項目には、次のように書かれている。⁵³（傍線は筆者による。）

（前略）余は根津も近々帰朝するならんも、今や支那の形勢穏やかならず、日本人中血気の輩数名踪跡を失せり。察するに南清地方に於て、孫文一輩と事を共にするにやあらん。今や北清の事未だ定まらず。然るに南清に不穩の事起るとせば、清国の将来は甚だ危殆なりといふべし。もし事を挙るの必要ありとせば、北方の事平らぎて後、正々堂々打出すべきなり。彼拳匪の例にならいて徒らに騒擾するが如きは、志士たるもの、為すべき事にあらず、唯外人容喙の便宜を与ふるに過ぎず。清国の将来の為に慎重の体度を取るべきは同国志士の為に必要なるのみならず、日本人にして、殊に同文会員中、これを扇動せんとするものありとせば、百方これを止むるの策を講ぜざる可らず。故に根津帰朝の後、更に一人を当分南京に派して前述の輕拳を抑へ、同地の内情を本部に報じ、又同地同文書院の進退（事によっては引き揚ぐるの必要あらんより）を処決するの重任を負はしむるの考なり。（後略）

「血気の輩数名踪跡を失せり」とは、具体的に誰なのか不明であるが、東亜同文会の会員であった福本誠・清藤幸七郎・宮崎滔天・

平山周のことを指しているのかもしれない。周知のように、この4名は孫文の主張に感銘を受け、その後中国革命の同調者となっていった。篤磨が問題視しているのは、同文会に革命の同調者が既に出てしまった事、義和団の乱により北方が不穩な現在において、南方で不穩な事が起こってはならない、ましてやこれに日本人が、殊に同文会員がこれ以上関わることは絶対にあってはならないということである。そのため、南京には管理の出来る者を一人派遣して（筆者注：常任幹事の田鍋安之助）、輕拳を抑えさせ、同時に新院長根津に南京同文書院の發展的解散、即ち上海での新学校への合併を申し付けたのである。実際、教員の山田良政が南京を去り、その後、孫文の惠州蜂起に参加し、死亡している⁵⁴、近衛篤磨の懸念はある程度当たっていたということになる。閉院した後もしばらくの間は南京に分院を残すことも模索されたのであろうが、結局はその道も閉ざされたのは、篤磨はじめ日本の東亜同文会のこの件に関する懸念が完全に払拭されることが無かったからではないか。

かくして南京同文書院は閉校し、二度と南京には戻らなかったのである。

謝辞

本論文執筆にあたっては、元南京師範大学附属中学の歴史教師である盧新建氏に貴重な資料を多数提供いただいた。氏は筆者が同校に日本語教師として派遣されていた時の同僚であり、氏からは多くの示唆をいただいた。改めてここに謝意を示したい。

1 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史一創立八十周年記念誌』（滬友会、1982年5月）pp. 76

2 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史一創立八十周年記念誌』上掲書、pp.85

3 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記第二巻』（鹿

(14) 南京同文書院の実像を探る ―書院生はどこで学んだのか―

- 鳥研究所出版会、1968年6月) pp.442~444
- 4 内藤虎次郎『支那漫遊燕山楚水』博文館、1900年6月(小島晋治『幕末明治中国見聞録集成』第4巻、ゆまに書房、1997年6月所収) pp.163~164
- 5 庄司得二『南京日本居留民誌』南京居留民団発行、1940年(在中国居留民団史集成第I期、第4巻、ゆまに書房、2021年7月) pp.3
- 6 『大阪商船株式会社五十年史』(大阪商船株式会社、1934年6月) pp.254~255
- 7 葉兆言、盧海鳴、韓文寧『老照片・南京旧影』(南京出版社、2012年12月) pp.93
- 8 葉兆言、盧海鳴、韓文寧『老照片・南京旧影』上掲書、pp.93
- 9 朱炳貴編著『老地図南京旧影』(南京出版社、2014年6月) pp.70~71
* 同光年間とあるが、おそらくは道光年間の誤植
- 10 川邊雄大『東本願寺中国布教の研究』(研文出版、2013年10月) pp. 126
- 11 劉健雲『中国人の日本語学習史』(学術出版会、2007年2月) pp.175
- 12 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記第2巻』上掲書、pp.442~443
- 13 『老地図南京旧影1898年《江寧府城図》』(南京出版社、2012年12月)
* フランス人宣教師 Louis Gallard による手書きの地図。近代的地図(座標地図)
- 14 劉健雲『中国人の日本語学習史』上掲書、pp.177
- 15 劉健雲『中国人の日本語学習史』上掲書、口絵3
- 16 三田良信『同文書院記念報 VOL18』(2010年6月) pp.17
- 17 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記第2巻』上掲書、pp.435~436
- 18 川邊雄大『東本願寺中国布教の研究』上掲書、pp.140
- 19 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史』(滬友会、1982年5月) pp.77
- 20 『老地図南京旧影1898年《江寧府城図》』上掲
- 21 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史』上掲書、pp.77
- 22 佐々木はちょうど同日に帯同した妻が息子を産出したため、この会見には同席していない。『近衛篤磨日記第三巻』(鹿島研究所出版会、1968年8月) pp.16
- 23 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記第三巻』上掲書、pp.17
- 24 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記第三巻』上掲書、pp.18
- 25 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記第三巻』上掲書、pp.18
- 26 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記第三巻』上掲書、pp.107
- 27 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史』上掲書、pp.77
- 28 朱炳貴編著『老地図南京旧影』上掲書、pp.70~71
- 29 「南京同文書院章程」(「分割2」JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.B12081968300、東亜同文会関係雑纂第一巻(B-3-10-2-13_001)(外務省外交史料館)画像204)
- 30 陳濟民『南京掌故』(修訂版)(南京出版社、2012年3月) pp.207
- 31 陳濟民『南京掌故』(修訂版)上掲書、pp.208
- 32 佐野光一編者『何紹基名品絶句集一金陵雜述三十二絶句・四十絶句』(厚德社、2010年6月) pp.8、pp.85
- 33 陳濟民『南京掌故』(修訂版)上掲書、pp.208
- 34 「明治三十三年六月十九日在上海総領事代理領事小田切万寿之助 外務大臣子爵青木周蔵殿公信」(「分割2」JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.B12081968300、東亜同文会関係雑纂第一巻(B-3-10-2-13_001)(外務省外交史料館))
- 35 撰文/葉兆言等、収蔵/俞康駿『老明信片・南京旧影』(南京出版社、2012年7月) pp.155
- 36 盧新建「鼓楼坡下大学発源地-妙相庵」(私家版) 2014年7月
- 37 中山路は孫文の棺を紫金山に作られた中山陵に運ぶために作られた南京で最初のアスファルト道路。田中重光『近代・中国の都市と建築』(相模書房、2005年4月) pp.191
- 38 『老地図南京旧影1898年《江寧府城図》』上掲
- 39 葉兆言、盧海鳴、韓文寧『老照片・南京旧影』上掲書、pp.299
- 40 「南京旧影老地図1943年《南京市市街図》」(南京出版社、2012年12月)
- 41 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記第三巻』上掲書、pp.131
- 42 庄司得二『南京日本居留民誌』上掲書、pp.14
- 43 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史』上掲書、pp.80
- 44 朱炳貴編著『老地図南京旧影』上掲書、pp.158
- 45 井手三郎「金陵紀行」『東亜同文会第8回報告』(1900年6月25日) pp.24
- 46 西村天囚(1865年~1924年)新聞記者・小説家・漢学者。明治33年1月より天囚は南京に遊学し、文正書院の西学堂の一室を借り、漢籍を学ぶとともに、朝日新聞の特派員として「金陵漫録」或いは「南京近信」と題する記事を寄稿した。西村に關しては、後醍醐良正著『西村天囚伝』(朝日新聞社社史編修室、1967年8月)等参照のこと。

- ⁴⁷ 「明治三十三年六月十九日在上海総領事代理領事小田切万寿之助 外務大臣子爵青木周蔵殿公信」上掲、本文は手書き、翻刻の上掲載。
- ⁴⁸ 『明治文学全集62明治漢詩文集』（筑摩書房1983年8月）pp.183
- ⁴⁹ 滬友会『東亜同文書院大学史』（滬友会、1955年7月）pp.23
- ⁵⁰ 「同文書院南京分院ニ関スル件」「在上海東亜同文書院ニ於テ南京ニ分院設立計画一件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B12081982800、在上海東亜同文書院ニ於テ南京ニ分院設立計画一件（B-3-10-2-17）（外務省外交史料館）
- ⁵¹ 東亜同文書院滬友会同窓会編『山州根津先生伝』（根津先生伝記編集部、1930年5月）pp.75
- ⁵² 東亜同文書院滬友会同窓会編『山州根津先生伝』上掲書、pp.393
- ⁵³ 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記第三卷』上掲書、pp.194～195
- *1900（明治33）年6月23日の項目
- ⁵⁴ 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史―創立八十周年記念誌』上掲書 pp.82